

愛知大学国際コミュニケーション学部「アジア共同体の平和学」講義 二〇二四年二月二日
小河孝・加藤哲郎・松野誠也『検証・一〇〇部隊——関東軍馬防疫廠と細菌戦』

(花伝社。二〇二四年九月。第三章)より抜粋・改稿

情報戦としての細菌戦

加藤哲郎

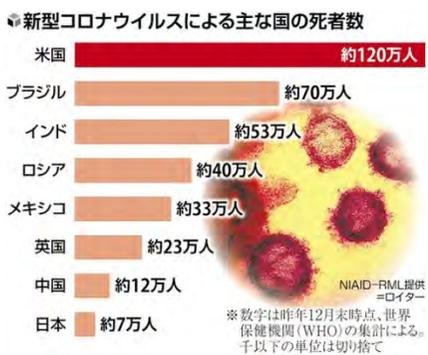
第一節 情報戦のなかでの七三二部隊・一〇〇部隊問題

一 コロナ・パンデミックとインフォデミック
コロナ・パンデミックは終わっていない

二〇二〇年五月、新型コロナウイルス COVID-19 の世界的流行が広がりつつづけていたなかで、米紙『ニューヨークタイムズ』は、「パンデミックの終わり方には二通りあるという。一つは医学的な終息で、罹患率と死亡率が大きく減少して終わる。もう一つは社会的な終息で、病気に対する恐怖心が薄れてきて終わる」と述べていた。

それから四年、二〇二四年五月に至っても、世界保健機関 (WHO) による医学的パンデミック終了宣言は、出されていない。その代わりに、二〇二〇年一月三〇日に発せられた社会的「緊急事態宣言」は、二〇二三年五月五日に終了宣言が出された。公式発表で六億人以上の感染者、死者七〇〇万人以上、実際には三〇〇〇万人に達したと言われるコロナ・パンデミックの犠牲者と集団免疫の広がりのおかげで、患者数減少を認め、各国の実情に応じて、「緊急対応の状態からほかの感染症とあわせて管理する段階に移行する」ことがよびかけられた。その延長上で、コロナ・パンデミックの教訓を踏まえて、将来また起こりうるパンデミックに備えた新たなルールづくり「パンデミック条約 IHR (国際保健規則)」制定が次の課題とされた。日本では二〇二三年五月に、感染症法上の位置づけが「五類」に引き下げられた。

パンデミックの脅威と恐怖を体験した世界では、コロナ・ウイルスのような感染症を、巨大自然災害や戦争に匹敵する人類的危機とみる考え方が広がり、一四世紀の黒死病 (ペスト)、一九世紀のペスト、第一次世界大戦時のスペイン風邪、等々の歴史が顧みられ、政治史中心の歴史では見逃されがちな感染症大流行とそれへの対策による民衆生活の大きな変化、医学・医療と科学技術が結びついた生命と生存の歴史に、光が当てられた。



パンデミックとインフォデミック

パンデミックは、同時に世界的なインフォデミック（大量情報感染）をもたらした。疫病の流行に伴う流言やフェイク・ニュースが、急速かつ大量に広がって、社会に混乱をもたらした。

二〇二〇年新型コロナウイルス・パンデミックの初期から、中国武漢から発症が始まったコロナウイルスの感染源について、野生コウモリ由来の人獣共通感染症で自然感染であるという中国政府他の主張と、アメリカのトランプ大統領（当時）に典型的な武漢ウイルス学研究所から人為的に漏洩したという人工的感染説、バイオハザード説が対立した。次から次に生まれる変異株とそれへの対策の中で、最終的決着は着いていないが、大同士の対立が如実に現れた。

感染源をめぐる中国政府と米国トランプ政権の情報戦から始まり、各国毎の国境閉鎖・航空路線中止、検疫やロックダウンの違いに依りて、多くのデマ情報・フェイクニュースを含むコミュニケーションの断絶と情報ギャップが見られた。インフォデミックでは、平時にも行われる事実と情報戦の落差が増幅され、フェイクやプロパガンダの性格が強くなる。

こうしたパンデミックIIインフォデミック下では、国単位の検疫や感染症対策の長期化の中で、歴史的な民族憎悪の感情や植民地主義の名残も、時に現れてくる。国内では、所得格差がパンデミックによる経済失速で拡大され、社会的弱者の生活・生存の危機が深刻化する。パンデミックのもとでは、情報へのアクセスにより、国家と国家、民族と民族、宗教や世代・性的志向等による差別が拡大する傾向が見られた。

さらにその延長上で、COVID-19ウイルスに対する mRNAワクチンの効果と副反応・後遺症について、陰謀論まがいを含む論争が続いている。ポスト・パンデミックの世界でも、ウクライナ戦争の中での核兵器・生物兵器・化学兵器についての脅迫情報や、中国、北朝鮮の生物兵器開発情報が流れ、AIによる生物化学兵器開発なども報じられた。

二 日本映画「ラーゲリより愛を込めて」に描かれなかった加害体験

二〇二二年末映画「ラーゲリより愛を込めて」の描いたもの

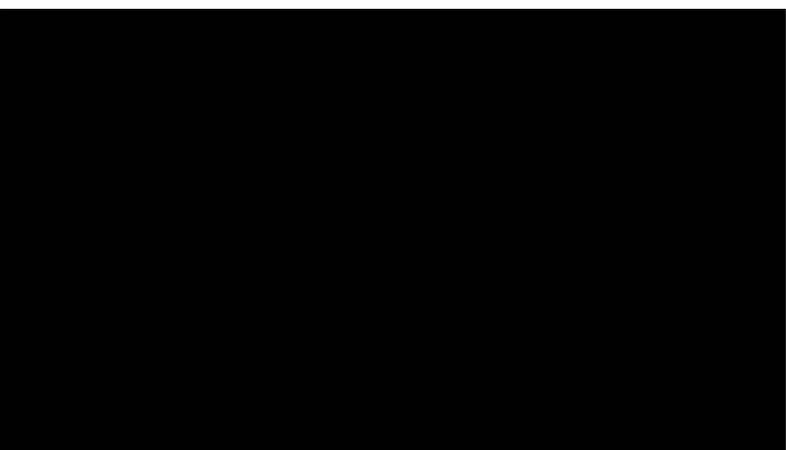
二〇二二年二月九日に日本で公開された映画「ラーゲリより愛を込めて」は、二宮和也・北川景子の主演で、一九四五年八月、満洲国ハルビンで別れ、ラーゲリ（強制収容所）に捕虜として抑留された山本幡男一等兵と、その帰国（ダモイ）を日本で待つ妻と幼い四人の子供の物語である。コロナ禍であったが、日本アカデミー賞を二部門で受賞し、劇場への観客動員二〇〇万人以上で、U-NEXTやAmazon Prime ほかで動画配信され、その後も見ることが出来る。

原作は、辺見じゅん『収容所から来た遺書』である。文藝春秋社から一九八九年に刊行され、第二一回大宅壮一ノンフィクション賞、第一一回講談社ノンフィクション賞を受賞した。第二次世界大戦後、シベリアに抑留され、強制収容所（ラーゲリ）内で死んだ山本幡男の遺書が、彼を慕う仲間たちがソ連側の厳しい監視をかいぐって、七人が遺書の一部を記憶して帰国し、それを書きおこして遺族に届けた実話を描いた作品である。一九九二年に文庫化の後、一九九三年にテレビドラマ化、一九

「コロナワクチン『情報不十分』 後遺症患者らが国提訴——東京地裁」『時事通信』二〇二四年四月一七日。

「ウクライナは生物兵器を開発しているーロシアの主張をファクトチェック」BBC ニュース、二〇二二年三月一五日、「中国軍が生物兵器開発か 海洋生物毒素研究、条約順守確認できずと米が懸念表明」『産経新聞』二〇二四年四月二六日、「北朝鮮の大量破壊兵器に関する脅威を前に決意を示す韓米両国」『インド・パシフィック防衛フォーラム』二〇二三年三月六日、など。

九七年と二〇二一年に漫画化もされて、二〇二二年末に「ラーゲリより愛を込めて」として映画化されている。俳優座をはじめ四つの劇団が、四種類の脚本で、このラーゲリのドラマを舞台にした。ふたくちつよし脚色・演出の『ダモイ』（トム・プロジェクト）は、年を重ねて何度も再演された。



原作「収容所から来た遺書」の描いたシベリア抑留の三重苦

主人公は山本幡男、学生時代は社会主義に傾倒し、三・一五事件で検挙された経歴を持つ。東京外国語学校（現東京外国語大学）でロシア語を学び、満鉄調査部でソ連分析に従事し、ハルビン特務機関にも勤務していた。一九四五年八月二五日、ソ連の満洲国侵攻時に捕まり、翌年満洲からウラル山中のスヴェルドロフスクのラーゲリ（強制収容所）に送られた。ロシア語の通訳として重宝され、多くの収容者に慕われたが、その経歴からスパイと疑われ、**シベリア抑留の三重苦**「**飢えと酷寒と過酷な重労働**」の俘虜生活を九年も送った後、一九五四年八月、ハバロフスクのラーゲリで病死した。敗戦から一二年目の一九五七年になって遺族が手にした遺書は、一九五四年に亡くなった山本幡男の遺言が、仲間たちの記憶によって暗記され、持ち帰られたものだった。原作では七人、映画では四人が、島根県隠岐の妻子のもとに直接、ないし記憶をもとに書き起こした手紙で伝えた。「山本幡男の遺族のもの達よ」「お母さまへ」「妻へ」「子供等へ」の遺書本文そのものは、長男の山本顕一（立教大学名誉教授、フランス文学）が、著書とウェブ上で公開している。

「子供等へ」君達はどんなに辛い日があらうとも、人類の文化創造に参加し、人類の幸福を増進するといふ進歩的な思想を忘れてはならぬ。偏波（へんぱ）で矯激（きょうげき）きょうげきな思想に迷ってはならぬ。どこまでも真面目な、人道に基づく自由、博愛、幸福、正義の道を進んで呉れ。」

山本顕一『寒い国のラーゲリで父は死んだ』バジリコ、二〇二二年、二二・二五二頁。

http://www.br四.fiberbit.net/ken-yama/www.br四.fiberbit.net_ken-yama/Welcome.html（二〇二四年四月二〇日閲覧 以下同）

原作にも映画にもないスヴェルドロフスク市の戦後バイオハザード

原作はもとより映画でも、主人公山本幡男の人物、シベリア抑留の厳しさ、夫を待ち続けた妻ら遺族の気丈で健気な戦後の生活は、戦争の後遺症の問題として、よく描かれている。

しかしながら、細菌戦をめぐる情報戦という本書の観点からすると、この感動的な物語には、いくつかの欠落がある。

一つは、敗戦後に山本幡男ら一〇〇〇人の日本人が抑留されていた、スヴェルドロフスクという収容所の所在地（現在の**エカテリンブルク**）である。その町は、戦後ソ連の生物化学兵器開発の拠点の一つとなり、一九七九年のスヴェルドロフスク炭疽菌漏出事故の舞台となる。

ソ連崩壊後に明らかになったことは、**一九七九年三月三〇日深夜にスヴェルドロフスク州スヴェルドロフスク市内において発生した、生物兵器製造施設からの炭疽菌漏出事故であった**。炭疽菌の芽胞が作業ミスにより誤って大気中に放出され、吸引した一般市民の多くが**肺炎炭疽症**を発症し死傷したバイオハザードであった。ソ連政府の公式記録では、スヴェルドロフスク市内において一般市民九六名が感染し、うち六四名が死亡した。実際の死者は一〇〇〇人以上ともいう。

もう一つ。一九八九年の辺見じゅん（一九三九―二〇一一）の原作には出てくるが、二〇二二年の映画では省略された、重要な登場人物がいる。収容所仲間の陸軍獣医大尉・野本貞夫（一九一六年―一九九五年）である。幡男の長男顕一は、「父の収容所内での最も親しい友人」としている。スヴェルドロフスクでは一緒でなかったが、ハバロフスクの囚人収容所では「アムール句会」などで親しくし、山本幡男の長文の遺書「平民の書」の全文を読み込み、記憶を持ち帰るはずであった。しかし「平民の書」はソ連側に見つかり没収され、帰国後の記憶の文字おこしは、むしろ山本幡男のラーゲリでの日々の生活と文藝作品を、便せん二五枚にびっしり書いて長文の手紙にしたため送ったものとなった。

映画で省略された原作の野本貞夫は、陸軍中野学校・一〇〇部隊獣軍医

『収容所から来た手紙』では、野本貞夫はハバロフスクの収容所での準主役級で、「アムール句会」を一緒に進める仲間として出てくる。著者辺見じゅんも、長時間のインタビューを行った模様である。「元関東軍参謀部第二課にいた野本貞夫」は、「大正五年（一九一六）年生まれで、陸軍獣医大尉だった野本が、第一特別警護司令部要員として奉天へ派遣されたのは敗戦間際である。終戦でソ連に連行されると、対ソ情報を任務とする二課にいたことをかつての上官に密告され、スパイ罪で矯正労働二五年の刑を宣告された」「父も兄も陸士出の軍人一家に育った野本」は、「旧制二高から東京帝大農学部へ進んだ。学生時代には文学に憧れたこともあった」が、アングレンの収容所に長くいた野本は、ハバロフスク収容所での山本からの「アムール句会」の誘いには、すぐには乗らなかつた。しかし山本の人物に惹かれて、やがて句会の常連になる。

ハバロフスクの囚人収容所には、元関東軍参謀の瀬島龍三や関東軍の情報関係将校、山本幡男のようなハルビン特務機関員が多数入所していた。そこでの人物描写としては、野本の東京帝大卒や関東軍参謀二課の経歴で十分と思っただのか、あるいは野本の詳しい経歴を知りつつ著者が敢えて書かなかつたのかは不明だが、野本貞夫は「陸軍獣医中尉」であつたばかりでなく、新京（現長春）の関東軍軍馬防疫廠Ⅱ一〇〇部隊に勤務していた。しかも情報幹部要員として、陸軍中野学校にも派遣されていた。

小河孝は、妻・泰子の苛酷な帰国体験も交えた自伝である野本貞夫・野本泰子共著『幾星霜』（一九九六年）からその経歴を抽出し、年譜化している。

ケン・アベリック『バイオハザード』二見書房、一九九九年、一〇六頁以下。

辺見じゅん『収容所から来た遺書』文春文庫、八三一―八七頁。

略歴：野本貞夫 大正5（1916）年11月16日 新潟県生まれ
昭和9年 千葉県立安房中学卒
昭和13年 第2高等学校卒
昭和16年 東京帝国大学農学部獣医学科卒
東満洲の野砲連隊（どこかは記載なし）に所属
昭和18年 陸軍獣医大尉
昭和19年3月 陸軍中野学校（第2期乙種学生）卒
同年4月 関東軍参謀部第2課に着任
同年12月4日 100部隊に着任（上官は井田技師）
昭和20年8月6日 関東軍第1特別警備隊司令部の獣医部長として転属（新編成部隊で謀略部隊との記述あり）
ウズベキスタン抑留中に陸軍中野学校卒業が発覚し、「ソ連刑法第58条」に抵触するとのこと
で「強制労働25年の判決」を受け、戦犯としてハバロフスク第21分所に収監された（p212）。
11年4カ月の収容所生活をへて昭和31年（1956年）12月26日 興安丸で舞鶴に帰国（貞夫：
40歳、妻・泰子：30歳）。 昭和53年（1978年）埼玉県畜産試験場退職 1995年死去

妻：野本泰子 大正15年生まれ
昭和18年結婚（19歳） 昭和20年 ソ連参戦により新京から北朝鮮（定州）へ避難
昭和21年 定州より帰国
昭和31年に保健婦の資格を取る 昭和61年に大宮市役所退職
野本泰子が日本に帰国するまで100部隊の家族が北朝鮮の定州で悲惨な経験が記録されて
おり、三友一男の『細菌戦の罪』に100部隊の終焉が書かれていたことが裏付けられた。

この野本貞夫の陸軍中野学校・一〇〇部隊歴を含め、収容所にいた瀬島龍三ら関東軍幹部の中国人
やロシア人への加害が書き込まれていれば、『収容所から来た遺書』は、より陰影のこもった物語と
なったであろう。残念ながら同書には、ロシア人将校との関係は詳しく出てきて、抑留生活の厳しさ
や日本人虐待の事実は分かるが、山本幡男の満鉄時代を含め、戦時中の中国人との交流や関係性はほ
んど出てこない。

三 韓国映画「京城クリヤー」に描かれた日本製「炭疽菌怪獣」

二〇二三年末クリスマスの韓国映画「京城クリヤー」

日本での「ラーゲリより愛を込めて」上映からちょうど一年後、二〇二三年のクリスマスから二〇
二四年の新年にかけて、韓国及び日本の若者の中で、時ならぬ「七三一部隊ブーム」が起こった。グ
ーグルでの検索語で「七三一部隊」が増加したのである。

その理由は、デジタル映画配信サイトNetflix上で、「京城クリヤー」が配信され、韓
国では、公開後の第一週目から四週連続でトップ一位を記録。日本でも一〇代・二〇代の若者の間で
急速に広がり、公開初週でトップ四にランクインし、三週連続でトップ一〇入りするなど話題となっ
た。非英語圏の各国でも、テレビシリーズで四週連続トップ一〇入りを果たした。

ドラマの舞台は、第二次世界大戦の末期、日本の植民地であった朝鮮のソウルである。敗戦前夜の二
九四五年五月、ドラマでは、日本軍の「加藤軍医」がソウルの病院での炭疽菌研究で人体実験をし、
「クリヤーチャー」怪物を生み出してしまった。ここでの「加藤軍医」は、加藤清正の朝鮮出兵を想
起させる。

このモデルとなったのは、明らかに「関東軍防疫給水部七三一部隊」であった。公式には一九三
六年につくられ、旧満州・ハルビン郊外の平房で細菌戦の研究を行い、人体実験もしていた。ドラマ

の中では、人体実験の被験者は「マルタ」と呼ばれ、日本の植民地支配に抵抗する「抗日」活動をしていた朝鮮の人たちが拘束され実験棟に連行されていた、と描写されている。

ただし、この映画は、史実にもとづいているわけではない。第二次世界大戦中に細菌戦が行われたのは事実であるが、細菌爆弾は満洲国ハルビン郊外の平房で作られ、実際に撒かれたのは農安、常德、浙贛、寧波、金華などの都市へのチフス菌、コレラ菌の散布であった。日本の植民地であった朝鮮半島での製造・使用の事例は知られていない。

また、日本軍に反抗する抗日分子、いわゆる「マルタ」の多くは、中国人・ロシア人であり、ハルビン近郊が多くの朝鮮族の住む地域であったにもかかわらず、確認された朝鮮人の事例は四名とされている。



ソウルの「炭疽菌怪獣」は敗戦後日本の「ゴジラ」のような想像の産物

炭疽菌 (*Bacillus anthracis*) が「怪物」を作れるかどうかとも、医学的には怪しい。致死率が高く、皮膚炭疽症では水疱状から潰瘍・痂皮になる症状が見られるが局所的であり、全身が潰瘍状になって人間を襲うと言った想定は、あくまで想像上の産物である。

ただし、現代の生物兵器の一つの典型が炭疽菌であり、戦時中は七三一部隊・一〇〇部隊に共通する細菌兵器開発の重要な病原菌となっていたという意味では、「日本軍によってつくられた炭疽菌怪獣」というストーリーは、ある程度のリアリティがある。

むしろ、なぜこのような映画が現代の韓国で作られ、多くの人々に受け入れられたかが問題である。いわゆる韓流ドラマの人気スター、パク・ソジュン、ハン・ソヒが主演したのも重要であるが、Netflix ホームページの宣伝文句が「一九四五年、京城。植民地時代の陰鬱なソウルで、生き残りをか

崔圭鎮・長谷川さおり「七三一部隊と関連した韓国の研究状況および課題、七三一部隊の究明

が韓国にとっても重要な理由」『戦争と医学』第二四巻、二〇二三年一二月。楊彦君『関東軍

七三一部隊 実録』北京外文出版社、二〇一六年、三三頁には、中国側資料からの朝鮮国籍

「マルタ」として、李基洙、韓成鎮、金聖端、高昌律の四人の名前を挙げている。

けて戦う実業家と人捜しの専門家は、人間の貪欲さが生み出した怪物に立ち向かう」であったことも、重要である。端的には、日本の植民地支配の象徴が「炭疽菌怪獣京城クリーチャー」であった。日本映画で言えば、朝鮮戦争期の一九五四年に作られた特撮怪獣映画「ゴジラ」が、ビキニ環礁での米国の水爆実験に着想を得ており、米国の占領が終わってようやく広島・長崎の原爆被害の実相が知られるようになった時期に、「核の落とし子」として「怪獣ゴジラ」が描かれたことが想起される。



韓国人作家の意図と視聴者のSNSでの反応

「京城クリーチャー」では、七三一部隊の軍医による人体実験から怪物が生まれたというストーリーリーとなっている。その理由については、同ドラマの脚本家カン・ウンギョンは、韓国メディアに対し

「(植民地)時代を象徴できるものは『怪物』」だと考えた、と話している。ドラマでは、植民地支配のもとでいかに朝鮮の人々が虐げられ、弾圧と差別の下で生きていたかが描かれる。日本語教育と「創氏改名」の時期である。独立を目指す朝鮮人青年活動家たちにも、目配りされている。

誠信(ソンシン)女子大学の徐炯徳(ソ・ギョンドク)教授は、フェイスブックで同作に対する日本視聴者の反応を「『京城クリーチャー』は日帝強占期を部隊にした時代劇で、日本軍七三一部隊で丸太生体実験を通じて怪物が誕生するという設定の中に実際の歴史的悲劇を反映している。」と述べた。徐教授は、「パート1が公開されてから日本Netflixでも上位圏を手堅くキープして、日本視聴者の高い関心を集めている」としながら「『京城クリーチャー』によって日本教育でほとんど扱われていなかった七三一部隊や生体実験など歴史的事実が日本のネットユーザーによく伝わった点は大きな意味があると考え」と意味づけた。

韓国語のソーシャルメディア(SNS)の掲示板には、「七三一部隊を知る契機になった」「バク・ソジュンが登場するというのが見たが七三一部隊のことをはじめて知った」「最初は反日ドラマだと思ったが、実は怪物が登場すること以外は七三一部隊は本当だった」などのコメントが寄せられた。その他にも、SNS上には「会社の同僚とドラマに関して話をすると七三一部隊を知らないこと

に驚いた」「ドラマを契機に日本の陰の歴史を知った」などのコメントもあった。逆に「反日ドラマだ。七三一部隊をそのまま扱えばいいのに、怪物が誕生する設定はやり過ぎだ」と拒否感を示すコメントも見られた。

日本での若者の反応と「反日映画」という批評をどう見るか

脚本作家カン・ウンギョンは、「時代劇は外国では関心がないという。ところが私と監督は多くの方々に見てほしいという意志があった。Netflixがコンテンツに力を与える波及力を持っていると思っただ」と話した。それと共に「誰かの好みに合わせて出した作品ではない。途方もなく多くの努力があった」と強調し、「最も驚いたのは日本の順位だった。私は無視されると思った。特に広告を多く使ったわけでもないはずだが、数値が意味するのは何なのかと思った。また、日本の一〇代の間で七三一部隊のグーグル検索が急速に増えているという話を聞いた。力になったし、『やってよかった』と思った」と付け加えた。

この映画への日本での反応には、「反日映画」というものも少なくない。『デイリー新潮』の「日本人にとっては旧日本軍があまりに残虐に描かれており、正直いい気持ちにはならない」「細菌兵器を研究していた七三一部隊は人体実験も行っていたとされるが、終戦時に旧日本軍が資料を処分しており、詳しい実態が明らかになっていない。本来は慎重な議論が求められるテーマである」といった反応がある。

これについての韓国の制作側の評価が興味深い。「七三一部隊が怪物を生み出すというプロットは、韓国では典型的なもの。しかし、一昔前であればそのような反日的な作品は、韓国の国内向けとして消費されてきました。主要な輸出先だった日本への配慮があったからです。」ところが、Netflixなどの全世界に向けた動画配信サービスが隆盛している今では、「相対的に輸出先としての日本の重要度が下がってきました。だから、日本への配慮が必要なくなり、反日的な作品であっても堂々と世界中に向けて配信するようになったのです」ともいう。

植民地支配の体験は、加害者にはすぐに忘れられても、被害者には長く残される。脱植民地化と経済成長が進み、韓国文化そのものがグローバルに展開するようになると、かつての屈辱の歴史を、世界に率直に訴えるようになった。

日本の高校教科書にも七三一部隊は出ていた

この韓国映画「京城府リーチャー」について、筆者は二〇二四年四月に、「ハフポスト」紙のインタビューに答え、長文のコメントを寄せている。

韓国との関係では七三一部隊研究は少なく、ソウルでの人体実験は事実とは異なることを前提として、「日本人にも、海外の人にも、七三一部隊について考えるきっかけになったと思います。ドラマ

『中央日報日本語版』二〇二四年一月五日。

。「韓国ドラマ『京城府リーチャー』は反日プロパガンダか」『デイリー新潮』二〇二四年〇一月二六日（『週刊新潮』二〇二四年一月二五日号掲載）、「韓国人気女優のSNS発言に韓国内で「反日マーケティングか」の声あがる理由——話題のネットフリドラマ『京城府リーチャー』を巡りネット上で日韓歴史論争勃発」『JBプレス』二〇二三年二月二七日。「七三一部隊って本当？」『京城府リーチャー』視聴した日本ネット民ざわつく」『時事ドットコムニュース』二〇二四年〇一月〇五日、「『京城府リーチャー』監督が「絶対に反日ドラマではない」と強調。不満の声を受けて“新シーズン準備中”」『スポーツソウル』二〇二四年一月一日、など。

を入り口にして、本当はどうだったんだろうか。七三一部隊とはなんだったんだろうかということ、ぜひ考えて、学んでほしいです」と答えておいた。

その際筆者は、長野県飯田市の平和祈念館における長野県出身七三一部隊隊員の遺品や証言の展示をめぐる教育委員会と市民団体の交渉問題を事例に解説した。

日本には家永教科書訴訟以来、七三一部隊の細菌戦・人体実験を認めたくない人々がいる。二〇〇二年の東京地裁判決で事実関係は認められたにもかかわらず、日本政府は、七三一部隊の存在のみを認め、細菌戦や人体実験を認めていない。そのことから、自治体や公共機関が日本軍の加害責任を認めることを困難にしている、教科書等には出ていないだろう、と述べておいた。

ところが「ハフポスト」の若い記者は、自分で日本の高校教科書を調べ、一冊だけで、それも本文ではなく注のかたちではあるが、山川出版社の『詳説 日本史』現行版に、以下のような記述が文科省の検定をくぐって入っていることを見出した。この教科書では、中国大陸での日本の侵略加害を示すために、七三一部隊の細菌戦・人体実験ばかりでなく、日本軍の従軍「慰安婦」問題についても記している。

① 中国戦線では毒ガスも使用され、満州などにおかれた日本軍施設では毒ガスや細菌兵器の研究がおこなわれた。満州のハルビンには、731部隊と呼ばれる細菌戦研究の特殊部隊(石井四郎中將ら)がおかれ、中国人やソ連人の捕虜を使った生体実験がおこなわれた。

② 朝鮮では1943年、台湾では1944年に徴兵制が施行された。しかし、すでに1938年に志願兵制度が導入され、植民地からも兵士を募集していた。また、戦地に設置された日本軍向け「慰安施設」には、日本・朝鮮・中国・フィリピンなどから女性が集められ、慰安婦として働かされた。



これは、予期せぬことであった。一九八一年の森村誠一『悪魔の飽食』に始まり、一九九五年前後の各地での「七三一部隊展」や市町村史などでの元兵士たちの証言収集、中国からの被害者・遺族の訴え、それに二〇一七年NHKスペシャル「七三一部隊の真実」放映によるハバロフスク裁判の見直

「「七三一部隊」を描いた韓国ドラマから日本人は何を学ぶか。パク・ソジュン主演『京城クリーチャー』が問いかけること」「ハフポスト」二〇二四年〇三月三〇日。

「七三一部隊の解説パネル設置 飯田市平和祈念館が方針転換」『朝日新聞』二〇二三年九月二日。

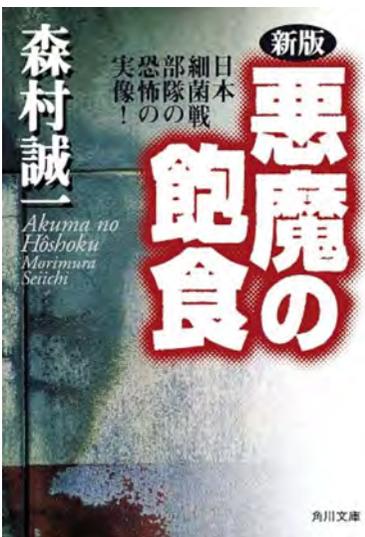
し、「留守名簿」「職員録」の発掘など、国内外での研究の進展によって、高校教科書に書かれるようになったことを知った。この四〇年の情報戦、学術研究と歴史報道の成果である。

四 加害体験の世代継承——外交官岡本行夫と『自伝』の細菌戦告発

七三一部隊研究第三段階に現れた加害体験の世代継承

七三一部隊については、現在研究史上では、第三の高揚期を迎えている。

筆者は別の所でも書いているが、第一期は、森村誠一『悪魔の飽食』のベストセラーによって、日本の戦時細菌戦部隊の存在が広く知られるようになった一九八一年以降である。ジャーナリスト下里正樹と組んだ森村誠一のドキュメンタリーは合わせて六〇〇万部も読まれ、隊員の証言のいくつかも本になった。同じ頃に、常石敬一『消えた細菌戦部隊 関東軍七三一部隊』（海鳴社、一九八二）から学術的研究が始まった。同時に、森村誠一の集めた写真の一部に七三一部隊とは無関係なものが含まれたりしていて、当時から日本軍の加害事実を語ることへの反発は大きかった。



第二期は、一九九五年の戦後五〇周年前後である。老境に入ったがまだ存命中だった兵士たちの加害体験を含む戦争体験の発掘が、部隊単位・地域レベルで相次いだ。七三一部隊について言えば、各地で「七三一部隊展」が開かれ、多くの証言が集められた。常石敬一の他、ソ連・中国・米国の史料を用いた松村高夫・近藤昭二・西里扶冏子・青木富貴子等の研究が現れ、なによりも、人体実験・細菌戦の直接の被害者であった中国人遺族らによる国家賠償請求裁判が始まった。二〇〇二年の東京地裁判決では、国家賠償は棄却されたが、事実認定では細菌戦・人体実験が認められた。



筆者は、二〇一七年のNHK特集「七三一部隊の真実」放映と、西山勝夫編『留守名簿』の刊行によって第三段階が始まった、と論じてきた。筆者自身の著作『「飽食した悪魔」の戦後』及び『七三一部隊と戦後日本』（共に花伝社刊）も、そこに位置づけている。すでに当時の少年兵もほとんど没

高校教科書『詳説 日本史 改訂版』山川出版社、二〇二二年、三六五頁。これは「ハフポスト」紙・富田すみれこ記者の取材による発掘である。

し、存命する関係者は少なくなったが、ソ連崩壊でアクセス可能になったハバロフスク裁判音声資料、米国の占領期GHQ収集資料、二〇一五年に新館がオープンした中国の七三一部隊記念館「[侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館](#)」の資料収集と各国語での発信、それに日本側の厚生労働省復興員・恩給資料、防衛省防衛研究所所蔵資料などの多くがデジタル技術をも用いて利用できるようになり、新たな研究の条件が整ってきた。



同時に、証言を拒み沈黙を守り通して亡くなった大部分の七三一部隊医師ばかりでなく、初期の研究の中心を担った人々が次々に鬼籍に入り、若い世代への戦争加害体験の継承と国際的ネットワーク構築が急務になってきた。日本における七三一部隊研究の第一期を牽引した『[悪魔の飽食](#)』の森村誠一（一九三三・二〇二三）、下里正樹（一九三六・二〇二二）のコンビ、学術研究を切り開いた常石敬一（一九四三・二〇二三）が、コロナ・パンデミックの中で、相次いで亡くなった。第二期の地域証言発掘者の一人で、筆者らの前著『[七三一部隊と一〇〇部隊](#)』で、一〇〇部隊獣医から戦後岩手大学学長になった加藤久弥の軍歴の発掘に協力してくれた高橋龍児もなくなった。一九九四年の「七三一部隊展いわて」実行委員会の事務局長で、その記録を『[“関東軍防疫給水部”の不都合な真実](#)』（みちのく文庫、二〇一四年）にまとめたものが、事実上の遺言となった。

加藤哲郎『[「飽食した悪魔」の戦後](#)』花伝社、二〇一七年、同『[七三一部隊と戦後日本](#)』花伝社、二〇一八年のほか、加藤「[七三一部隊員・長友浪男軍医少佐の戦中・戦後](#)」（戦医研『戦争と医学』一九卷二号、二〇一九年五月、参照）。

『岡本行夫自伝』は亡父の七三一部隊歴の探求の記録

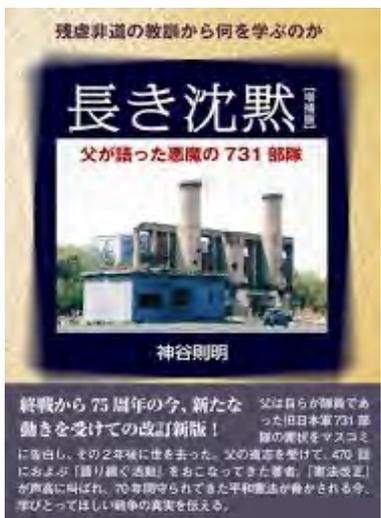
日本でもコロナ・パンデミックは多くの犠牲者を生んだが、その一人に外交官の岡本行夫（一九四五―二〇二〇）がいた。元外務省北米一課長で、日米関係や沖縄問題のエキスパートとして、外務省退職後も内閣総理大臣補佐官・外交顧問をつとめた。

このどちらかといえば体制派の外交評論家が、遺書とも言うべき最後の著書『危機の外交 岡本行夫自伝』（新潮社、二〇二二年）で書き残したものは、日米外交の最深部での交渉術と共に、自身自身の父親が七三一部隊に関係していたという、意外な告白と細菌戦の歴史の告発であった。この本は、著者の没後に、第三四回アジア・太平洋賞特別賞を受けている。

同書の第一章は「父母たちの戦争」と題され、著者なりの平和論になっているが、その根底にあるのは、戦後農林省の官吏であった亡父の、戦前・戦時中の知られざる経歴の探求であった。

岡本行夫の父・脩三は、一九〇九年に生まれ、京都大学農学部から一九三二年農林省に就職、農務局農政課で日本農業の生産性向上に取り組んだ。戦争には反対であったが、一九四〇年に内定していたイギリス留学が取り消され、徴兵されて満洲のアムール河畔孫呉の国境警備にまわされた。そこからハルビンの関東軍ロシア語学校に入学してロシア語を学び、ハルビン近郊平房の関東軍防疫給水部七三一部隊に、ロシア語通訳要員として配置換えとなった。

家族は日本に残してきて、脩三の勤務先は「伝染病を予防する部隊」としか知らされていないながら、脩三の妻・和子は、一九四五年一月に、六歳の長男を連れて一度だけハルビンに夫に会いに行き、それが七三一部隊であったことを、戦後になって知った。



岡本行夫の父脩三は七三一部隊でロシア語通訳だった

岡本行一の父・脩三は、一九四五年八月、七三一部隊の本隊と共に、朝鮮半島經由日本に逃げ帰った。以前勤務していた孫呉の部隊にいれば、そのままソ連軍の捕虜としてシベリア抑留になり、『収容所から来た遺書』の山本幡男のように、ロシア語通訳として一〇年以上の抑留者となったであろう。いや、七三一部隊勤務が判明すれば、一九四九年末のハバロフスク裁判の被告になっていたかもしれない。

しかし岡本脩三は、四人の子どもたちに中国大陸での従軍経験を詳しく述べることはなかった。戦後は農林省官僚に戻ったが、人が変わったように怒りっぽくなり、妻子との関係もギクシャクしていた。子どもたちには、厳格だが頑迷で意固地な人間に見えた。本棚にロシア語の本がならんでいたが、息子たちにする戦争の話は、自分がいかに懸命にロシア語を勉強し、首席で学校を卒業したかだけであった。一九六二年に農林省を退職し、七三年に肺がんで亡くなったという。

父の晩年に外務省に就職した岡本行夫は、子どもの頃に「パパは人を殺したことはあるの」と質問して、恐ろしい形相で叱りつけられた記憶があった。父の友人に「行夫君は戦争中のお父さんの仕事

を知ってるの」と問われ、「満洲で通訳をしていたと聞かされてます」と応えると、「ふーん、まあいいや」とだけ言われたが、父が対人関係がうまくゆかず、官僚として出世できなかった理由が、よくわからなかった。

父が亡くなって後に、母・和子は、夫の世話と家事・育児から解放されたかのように、大学に入り直して教職課程を学び、一人で海外旅行を楽しむようになった。息子たちに父が通訳をしていた勤務先が「関東軍防疫給水部」であったと告げたのは、その頃だった。「だいぶあとになって、あの有名な七三一と分かったときはびっくりしたわ。脩三さんの性格が歪んでしまったのはそのせいだって、その時分かったわ。せやけど、あんたら、こんなこと世間には絶対に言ったらあきませんで」と言われたと言う。時期は明示していないが、おそらく七三一部隊が森村誠一『飽食の悪魔』で広く知られた「有名」になった一九八〇年代以降、岡本行夫が、すでに日本外交の第一線で活躍していた時期であったようだ。

対米外交のかたわら調べてわかった「父の暗さ」の秘密

岡本行夫は、「僕は更に調べたかったが、脩三の経歴を世間に隠しとおしたい和子の懇願に遭って断念していた」と書くが、遺書とも言うべき『危機の外交』が、もともと副題「日米関係史」として構想されていたのに、「自伝」として冒頭に長く父母のことを書くことになったのは、どうやら秘かに亡父のことを調べ続けていたからのようだ。それも、日本の国内植民地というべき沖縄基地問題、日中・日韓関係にも深く関わった一九九一年外務省退官以降のようである。

二〇〇四年には平房の「侵華日軍第七三一部隊遺址」を訪れて父の足跡を辿った。七三一部隊の生き残りの少年兵を訪ねて、その実態を聞き取りしたりしている。きわめつけが、二〇一八年六月の七三一部隊「留守名簿」公開時の話である。自分自身で確かめるべく「国立公文書館で公開された父親の名前と『正式に』対面し」てコピーをとり、それを示して母の和子も否定できなくなったところで、ようやく詳しい話を聞いた。しかし、「脩三を知る生存者はいなくなっていた」。

この頃岡本行夫は、二〇一七年八月放映のNHKスペシャル「七三一部隊の真実」を見て、同番組を制作したスタッフにもわざわざ問い合わせ、さまざまな事実確認をしていたことを、筆者はNHKのスタッフから聞いた。

ここからわかるのは、岡本行夫の七三一部隊探求が、日本における関東軍防疫給水部Ⅱ七三一部隊研究の三つの段階に、ほぼ照応していたことである。さまざまな文献資料も集め、動かしがたい証拠をそろえて、第三段階に至ってようやく、母和子に「留守名簿」の父の欄を示し、詳しい体験を聞くことができた。七三一部隊に勤務中の父を満洲に訪ねた第一世代の母にとっては、それは石井四郎にいわれるまでもなく、「墓場まで持って行くべき秘密」であったのだろう。それを、第二世代にあたる息子の行夫が冷静に暴き出した記録が、『危機の外交 岡本行夫自伝』になったのである。

第二世代岡本行夫が認めた七三一部隊の人体実験と細菌戦

外交官・岡本行夫の七三一部隊調査は、正確であった。第一に組織的人体実験、第二に国際法違反のペスト菌の研究と増殖、第三に寧波と常徳の戦闘での細菌兵器使用を挙げ、「七三一部隊がやっていたのは、悪魔の所業であった」と断言する。

しかも、岡本行夫は、父脩三が「ロシア語通訳」であったことにこだわっていた。

「当時、ハルビンには八万人のロシア人が住んでいた。……自分たちの人体実験が外に洩れることを極端に畏れる石井四郎と七三一部隊の憲兵隊は、部隊の任務に少しでも関心を示したロシア人を住民の密告制度によって探しだし、片っ端から拘束して、スパイ容疑で七三一部隊敷地内の監獄に送り

込んだのである。つまり、脩三が『通訳』した相手とは、人体実験に使われていくロシア人収容者だったのだ。ロシア人への尋問は苛酷であった。日本の敗戦後にハバロフスクで行われた裁判では、乳飲み子を抱えたロシア人女性への人体実験も告発された。脩三は彼女の通訳もしたのだろうか。」

こうして息子の岡本行夫は、若いときは「時間があればフルートを吹いていた温和な文学青年」であった父脩三が、「戦争によって一変し、暗く自閉的になってしまった」秘密を知ったのである。このように、岡本行夫の父の秘密を探る旅は、七三一部隊の存在を、改めて世に問うものとなった。日本政府が公式には認めていない細菌戦や人体実験も、首相補佐官まで勤めた外交官が、自分の足と証人捜しで確認し、告発することになった。戦争の加害体験の、一つの世代継承のかたちである。

戦争体験の継承に時効はない

戦争体験の風化と、継承の必要性が言われて久しい。あと一〇年もすると、日本の第二次世界戦争体験者は、ほとんどいなくなる。当事者である第一世代が隠蔽し、沈黙し、問われても否定ないし歪めてきた史実は、消えてしまうことになる。

しかし、歴史研究やドキュメンタリー報道も、情報戦である。それらの蓄積で動かしがたい事実となって学校教科書に書き込まれたり、残された証言や日記などの史資料を切り口に、第二世代・第三世代が、親世代の思惑やしがらみを越えて真実を見出す場合もありうる。

岡本行夫の遺作はその一つの典型であるが、愛知県にも、七三一部隊の軍属だった父の命がけの証言を後世に伝える活動が続ける高校教師・神谷則明の記録がある。⁶

七三一部隊「留守名簿」の公開によって、筆者にたいしても、自分の親族が載っていないか、親が従軍医師だったが細菌戦に関わっていないか、亡父は戦場で死んだと言っているが旧満洲だったので真実を確かめてほしい、といった問い合わせがあった。

何よりも、中国や韓国、ロシア、モンゴルなどでの被害者・被害証言の発掘は続いており、関東軍司令部跡地で土に埋もれていた焼却途中の記録文書から、日本軍が「間諜」として連行した「マルタ」の氏名がみつかることもある。ソ連軍が大量に持ち帰った旧関東軍資料・記録から、新たな史実が発掘される可能性も残されている。

このような意味で、七三一部隊の研究は、当時を知る関係者がほとんどいなくなっても、なお研究が進展する可能性を残している。二〇二四年にも、「**七三一部隊、戦後も中国に一部残留との研究成果公表**」という新たな情報が、中国からもたらされた。本書第1章の著者松野誠也による「職員表」発掘の副産物である。

「中国黒竜江省ハルビンにある「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」が、旧日本軍の七三一部隊『関東軍防疫給水部』の一部が第二次大戦後も中国国内に残留していたとする新たな研究成果を公表したと、国営中央テレビが四日報じた。

日本の国立公文書館から昨年、陳列館に提供された七三一部隊の職員表を中国人研究者が分析した。中央テレビによると、七三一部隊はこれまで終戦時に撤収したと考えられていたが、分析によると、五二人が中国にとどまり、拘束されて旧ソ連に送還されたり、身分を偽って中国国内に潜んだりしていたとされる。」

一〇〇部隊をめぐる情報戦は始まったばかりである

ただし、本書の主題である関東軍軍馬防疫廠Ⅱ一〇〇部隊については、七三一部隊のような研究の進展を述べることができる状況にはない。関東軍軍馬防疫廠Ⅱ一〇〇部隊は、防疫給水部Ⅱ七三一

同前書、三五―三六頁。神谷則明『長き沈黙』（かもがわ出版、二〇二〇年）。

『東京新聞』二〇二四年五月四日。

隊と同じく公式には一九三六年に出発しながら、独自に展開してきた。そのメンバーの規模は、七三一部隊の四〇〇〇人近くに比して小さく、一〇〇〇人程度であった。

その細菌兵器開発や人体実験については、一九四九年末の旧ソ連・ハバロフスク裁判の記録と、その被告の一人であった三友一男『細菌戦の罪』を除けば、資料も証言もほとんどなかった。中国側との貴重な共同研究で七三一研究を重ねてみた松村高夫の研究グループから、江田いづみによる一〇〇〇部隊の概括的研究が出たのを除けば、学術的研究も手つかずであった。

七三一部隊については、戦争と医学研究会に多くの心ある医師・医学者が集って、細菌戦や人体実験の記録や関係した学者たちの博士論文・医学論文を専門的に解読してきたが、一〇〇〇部隊については、専門的に獣医学を学んで取り組んでいるのは、前著『七三一部隊と一〇〇〇部隊』を共同で著した本書第II章執筆者・小河孝ぐらいである。中国での長春「偽滿皇宮博物館科学研究中心」での一〇〇〇部隊研究も、まだ始まったばかりである。

本節で見てきた映画やドキュメンタリーの系譜では、次章で述べるように、『収容所から来た遺書』で山本幡男が最初に体験するウラルのスヴェルドロフスク収容所が、戦後はソ連の生物兵器開発の基地になって一九七九年には炭疽菌事故をおこすこと、映画では省略されたが、辺見じゅんの原作には出てきた「山本幡男と最も親しかった収容所仲間」野本貞夫が、実は関東軍情報部ばかりでなく陸軍中野学校出身で一〇〇〇部隊の幹部の一人であったことなど、七三一部隊との接点で一〇〇〇部隊の影が見いだされた。しかし、すぐれたドキュメンタリー作家で野本貞夫に幾度もインタビューしたらしい辺見じゅんにおいてさえ、野本の戦争体験の中核に一〇〇〇部隊での細菌戦体験があり、それが同時に妻・泰子との長い生き別れのもととなった問題は、取りあげられることはなかった。本書第II章の小河論文は、その点を浮き彫りにする。



第二節 生物兵器開発の歴史と医学・獣医学の情報戦

一 生物兵器開発の歴史的展開と戦時日本の細菌戦・人体実験

『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ廉デ起訴サレタ元日本軍軍人ノ事件ニ関スル公判書類』外国語図書出版所、モスクワ、一九五〇年。三友一男『細菌戦の罪―イワノボ将官収容所虜囚記』泰流社、一九八七年、江田いづみ「関東軍馬防疫廠―一〇〇部隊像の再構成」松村高夫・解学詩・郭洪茂・李力・江田いづみ・江田憲治【戦争と疫病―七三一部隊のもたらしたもの】本の友社、一九九七年。

「中国侵略日本軍第一〇〇〇部隊による細菌戦に関する最新の罪証を長春で公開」『人民網』日本語版

二〇二二年九月一九日、こうした意味で、小河孝『満州における軍馬の鼻疽と関東軍―奉天獣疫研究所・馬疫研究処・一〇〇〇部隊』（文理閣、二〇二〇年）は先駆的で画期的な業績で、前著である加藤哲郎・小河孝『七三一部隊と一〇〇〇部隊』（花伝社、二〇二二年）のもとになったものである。

生物兵器開発は医療・医学の発展の裏側で進んできた

生物兵器 (biological weapon) は、核 (atomic, nuclear) 兵器・化学 (chemical) 兵器と並んで、ABC兵器・NBC兵器とよばれる。現代の戦争の最先端兵器の一つである。殺傷能力はきわめて高いが、核兵器に比べると材料の入手や製造が容易で、費用も少なく済むことから、「貧者の核兵器」ともよばれる。

日本の外務省ホームページには、「生物兵器とは、天然痘ウイルス、コレラ菌、炭疽菌、ボツリヌス毒素等の生物剤や、これらを保有・媒介する生物を使用して、人、動物、又は植物に害を加える兵器であり、大量破壊兵器の一つです。生物兵器は、使用された場合でも自然発生の疾病との区別が困難であり、また感染性のあるものについては、一旦使用されるとその効果が広範かつ長期的に持続するという特性を有します。また、消毒することにより証拠隠滅が可能のため、開発・生産の現場を検知することが困難であるとされます」として、一九二五年のジュネーブ議定書と一九七五年発効の生物兵器禁止条約の参照が求められている。

有害な植物や毒素による生物兵器そのものは、古代ギリシャからみられるが、毒ガスが用いられた第一次世界大戦の悲惨な結果を見て、化学兵器と生物兵器の使用が、一九二五年のジュネーブ議定書で禁止された。ただし、開発・生産・保有が制限されなかったために、日本の七三一部隊をはじめ、世界の大国は「防御用」と称して、ひそかに研究を続けた。

第二次世界大戦時においては、生物戦と言っても細菌レベルで、炭疽菌・鼻疽菌・コレラ菌・ペスト菌等の散布が生理学・細菌学で研究された。ナチス・ドイツでは人体実験が行われたが、細菌兵器を作るまでにはいたらなかった。関東軍七三一部隊が、中国大陸で実際に使って被害をうんだのはペストノミ爆弾 (PX) で、これが攻撃用兵器として代表的なものであった。

しかし、第二次世界大戦後の医療・医学の進歩で、ウイルスからゲノム解析・遺伝子操作にいたる新たな技術が加わり、一六七か国が締結した一九七五年の生物兵器禁止条約は、五年に一度の運用検討会議で履行状況を点検・確認することになっている。医学・医療・バイオテクノロジーのめざましい発達の裏側で、生物兵器の開発技術も更新され、バージョンアップされている。

「疫病↓伝染病↓感染症」と併行する細菌兵器開発と七三一部隊の遺産

日本では七世紀の「日本書紀」から疫疾・疾気などと災害とならぶ疫病の被害が語られ、明治の開国、西洋医学の導入に導かれて、天然痘、麻疹、水痘、コレラ、ペストなどヒトからヒトへと感染する「伝染病」への対策が国内地方政策の要となり、一八九八年の伝染病予防法制定につながった。これ

外務省「生物・化学兵器を巡る状況と日本の取組(概観)」平成二五年一月、
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bwc/torikumi.html>

生物兵器についての文献は多い。さしあたり、トム・マンゴールド・ジェフ・ゴールドバーグ『細菌戦争の世紀』原書房、二〇〇〇年、和気朗『生物化学兵器』中公新書、一九六六年、山内一也・三瀬勝利『忍びよるバイオテロ』NHKブックス、二〇〇三年、ウェンディ・バーナビー『世界生物兵器地図』日本放送出版協会、二〇〇二年、エド・レジス『悪魔の生物学』河出書房新社、二〇〇一年、W・ラフルーア＝G・バーメ＝島菌進編著『悪魔の医療史』勁草書房、二〇〇八年、井上尚英『生物兵器と化学兵器―種類・威力・防衛法』中公新書、二〇〇三年、エドワード・M. スピアーズ『化学・生物兵器の歴史』東洋書林二〇一二年、など参照。

は、海外からの危険思想取締を目的とする一九〇〇年治安警察法制定と共に、明治政府の内務省による国内治安維持の二本柱となった。

しかし、その後の一九四五年敗戦期占領軍GHQによる厚生行政改革と伝染病研究所再編・予防衛生研究所開設、生理学・細菌学の分子生物学・ウイルス学・遺伝子学などへの再編・細分化、それに人獣共通感染症を扱う獣医学などの発達によって、伝染病より広い破傷風や虫垂炎などに人に感染させにくい病原体の病気を含め「感染症」として、一九九七年伝染病予防法を感染症予防法に改編、国立予防衛生研究所も感染症研究所へと名称を改めた。

つまり、七三一部隊・一〇〇部隊による日本の生物兵器開発は、日本語で「疫病↓伝染病↓感染病」と推移した人獣共通感染症に対する「伝染病」段階、生物戦の武器で言えば「細菌戦」段階での世界の生物兵器戦争の原型となり、かつ、バイオハザード（有害生物災害）やバイオテロ問題の先駆となった。ただし農林水産省管轄の獣医学では、動物感染症と共に人獣共通感染症を扱いながらも、一九五一年制定の家畜伝染病予防法が、生き続けている。

その間、日本の医学界では、七三一部隊関係者による細菌戦・人体実験の敗戦当初の隠蔽、極東国際軍事裁判（東京裁判）と併行するGHQ及び米国の四次にわたる日本細菌戦調査団へのデータ提供による免責、その免責を踏まえた医学界・医薬産業での復権という歩みをたどるが、それについては筆者は前著などで幾度か詳述してきたので、その参照を求める。

それでも述べたように、この米国軍・GHQへの寄生・癒着による免責・復権によって、細菌戦・人体実験に直接たずさわった医師・医学者たちからの反省は、極めて弱かった。

戦後ドイツにおける生物戦の反省と医療倫理の形成

ただし、ナチスのホロコースト、収容所内での残酷な人体実験や安楽死計画を経験した戦後ドイツでは、石井四郎さえ起訴されず裁かれなかった東京裁判とは異なり、ニュルンベルグ医師裁判で二三人の被告人が裁かれ内七名が絞首刑となった。インフォームド・コンセプト、医学実験の「被験者の同意の絶対的必要」など「ニュルンベルグ・コード」を制定し、医療生命倫理を意識的に構築してきた。

これは、第四代西ドイツ首相ヴィリー・ブランドの終戦二五周年演説「国民は自らの歴史を冷静に振り返る心構えが必要です」「なぜなら過去を記憶する者だけが、現在を見極め未来を見通すことができるからです。歴史との対話は特に若い世代にとって大切です。たとえ生まれる前のことだったとしても、引き継いだ歴史から誰も自由にはなれないのです」や、ヴァイツェッカー大統領の一九八

加藤哲郎『戦前の防疫政策・優生思想と現代』（戦医研『戦争と医学』誌二二巻二〇二一年二月）。

清水喜八郎『疫病から感染症へ』『日本内科学会雑誌』創立百周年記念号、第九一卷一〇号、二〇〇二年一〇月一〇日。

ただし、医師・医学者を中心とした七三一部隊の隠蔽・免責・復権と、獣医師を中心とした一〇〇部隊の隠蔽・免責・復権のプロセスは相対的に異なるので、本書では後者について改めて関説する。加藤『「飽食した悪魔」の戦後』『七三一部隊と戦後日本』、加藤・小河『七三一部隊と一〇〇部隊』参照。

わずかな例外について、秋元寿恵夫『医の倫理を問う―第七三一部隊での体験から』勁草書房一九八三年、常石敬一・朝野富三共著『細菌戦部隊と自決した二人の医学者』新潮社、一九八二、小高健『伝染病研究所』学会出版センター、一九九二年、常石敬一『七三一部隊全史』高文研、二〇二二年、参照。

小俣和一郎『ナチス もう一つの大罪……「安楽死」とドイツ精神医学』人文書院、一九九五年、同『検証 人体実験―七三一部隊、ナチ医学』第三文明社、二〇〇三年、クレー『第三帝国と安楽死……生きるに値しない生命の抹殺』批評社、一九九九年、神奈川大学評論編集専門委員会編『医学と戦争……日本とドイツ』（神奈川大学評論叢書第五巻）御茶の水書房、一九九四年、など参照。

五年戦後四〇年演説「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです」などの、西ドイツ政府としての公式の反省にもとづくものであった。一九九〇年東西統一後のドイツ政府も、こうした立場を踏襲している。

日本政府が、七三一部隊の存在は認め、二〇〇三年東京地裁判決や山川出版社の高校教科書『詳述日本史』の記述を検定で認めながらも、公式には未だに細菌戦や人体実験を認めない態度をとっているのは、対照的である。

二 細菌戦仮想敵国ソ連にとっての日本の生物兵器開

七三一部隊と一〇〇部隊の同時出発

筆者は幾度か引用してきたが、トム・マンゴールド・ジェフ・ゴールドバーグ『細菌戦争の世紀』（二〇〇〇年、原書房）は、「生物戦の愚かな第一歩は、日本の七三一部隊から始まった」と断言している。



その冒頭で、七三一部隊の犠牲者一〇八人と数千人の中国人遺族を代表した王選の発言として、「一九三二年から四五年にかけて、中国北西部の満洲に司令部を置く関東軍七三一部隊は、中国との戦争中から占領時代に、日本軍の生物兵器開発計画の一環として、捕虜を使って身の毛のよだつ人体実験を行った。部隊を指揮したのは、石井四郎中将だった。……一九三二年、石井は、求めていた最適の環境を、満洲北部ハルビン市の背陰河という村でついに発見した」という言葉を引いている。

日本での学術研究の先駆者、常石敬一は、『医学者たちの戦争犯罪 関東軍七三一部隊』（朝日文庫、一九九九年）に、小泉親彦軍医監の支援のもとで、石井四郎軍医正を長とする日本陸軍軍医学校防疫研究室の正式の発足は一九三二年四月一日であったが、実際の活動は八月からだったという。

エド・レジス『悪魔の生物学』は、「一九三二年、日本陸軍は石井のために、東京の陸軍軍医学校には研究施設を、中国のハルビンには細菌培養施設を、背陰河という近くの村には試験場を設けた。三つの施設がそれぞれに生物戦の研究に従事していたが、いずれも同じ石井四郎の管轄下にあった」と、日本の生物兵器開発の起源を記している。

同じ頃に、一〇〇部隊の原型もできていた。詳しくは本書第一章の松野誠也の研究に譲るが、現代中国の七三一部隊研究を牽引する楊彦君・上海交通大学大学教授は、関東軍の軍医たちの人体実験を含む

トム・マンゴールド・ジェフ・ゴールドバーグ『細菌戦争の世紀』原書房、二〇〇〇年、二三一―二六頁
常石敬一『医学者たちの戦争犯罪 関東軍七三一部隊』朝日文庫、一九九九年、一四〇―一四一頁。
エド・レジス『悪魔の生物学』二二―二三頁。

細菌戦研究と軍獣医たちの軍馬を素材にした細菌戦研究がほぼ同時であったことに着目し、「一九三三年四月 関東軍臨時病馬收容所が細菌研究室を設立し、関東軍第一〇〇部隊が細菌戦の準備を始めた印となった」と述べる。本書第I章によれば、関東軍司令官武藤信義「関後令第二六〇号」一九三三年二月十五日「自今関東軍病馬收容所ヲ関東軍臨時病馬廠ト改称ス」に伴うものだった（『混成第一四旅団作命綴（甲）』所収。防衛省防衛研究所戦史研究センター史料室所蔵）。

公式には一九三六年六月二五日、関東軍防疫給水部と関東軍軍馬防疫廠は、天皇の認可を得て同時に出発する。ただし、常石敬一は、設立時の公文書で「関東軍防疫給水部」が「細菌戦準備」であるのに対し、「軍獣防疫廠」が「細菌戦対策の研究機関」となっていて、実戦用・攻撃用には七三一部隊がすでに十分な準備ができていたこと、一〇〇部隊はこの段階では防御研究機関であったことに注意を促している。

ゾルゲは日本の細菌戦準備を一九三七年につかんでいた

こうした動きは、関東軍の細菌戦の仮想敵となっていたソ連では、早くに注目されていた。ソ連での生物兵器開発計画は一九二〇年代に始まったとされるが、ソ連を仮想敵にした日本の生物兵器開発に注目したのは、満州事変から満洲国が設立された一九三〇年代に入ってからであった。

筆者は、七三一部隊と細菌戦の研究を、それまで続けてきた旧ソ連のスターリン・粛清、ゾルゲ事件のインテリジェンス研究から出発して二〇一〇年代に調べてきたが、そこで、ソ連のインテリジェンスに関わる一つの問題につきあたった。

その内容は『「飽食した悪魔」の戦後』で詳述したが、長年の七三一部隊研究の専門家、松村高夫・慶応大学名誉教授とジャーナリストの近藤昭二氏に助言を求めて、貴重な知見と資料の提供を受けたさいに、近藤氏から出された一つの質問に直面して、七三一部隊とゾルゲ事件の接点に取り組むことになった。それは、一九四一年に検挙されたゾルゲ諜報団は、早い時期に満州での七三一部隊の秘密の存在をつかみモスクワに打電していたのではないかという、ゾルゲ事件研究者として書物も出していた筆者にとっては、思いがけないものだった。筆者を含む日本のゾルゲ事件研究者の側から、ゾルゲ事件と七三一部隊の関連が問題にされたことはなかったが、七三一部隊研究者の側では、ゾルゲ事件が問題にされていたのである。ただし、実際に打電された電報はみつかっていない。

日本の敗戦直後に旧満州などからソ連に戦争捕虜として連行された抑留日本人はおよそ六〇万人、その中から七三一部隊・一〇〇部隊の関係者を捜しだし、ハバロフスク裁判の被告・証人を選定するにあたって、当時のソ連は、どこからどのような情報を得て、いつから細菌戦・人体実験について察知していたのかを説明することは、ハバロフスク裁判記録の信頼性にも関わる。

近藤昭二氏は、ゾルゲ事件の裁判記録の中に、重要な一節を見つけていた。無線通信技師マックス・クラウゼンによる一九四二年一月五日第一回警察訊問調書中の記述で、これをもとに近藤氏は、「一九三七年に早くもリヒャルト・ゾルゲは七三一部隊について電報を打っているが、情報は近衛公爵周辺から得たと考えられる」と、自ら訳したシェルダン・H・ハリス『死の工場』に註記していた。典拠は、次の箇所である、

一九三七年 月日不詳 日本陸軍は戦争に備ふる謀略戦術として「ハルビン」市又は其の付近に「コレラ」「ペスト」等の細菌研究所を設け盛に培養し居れり。右は当時「ゾルゲ」宅で同人と「シュタイン」「英国紙記者ギンター・シュタイン、ゾルゲ諜報団の一員だが一九三

楊彦君『関東軍第七三一部隊 実録』北京外文出版社、二〇一六年、一七二頁。

常石敬一『医学者たちの戦争犯罪 関東軍七三一部隊』一七四頁。

ケン・アリベック『バイオハザード』二見書房、一九九九年、二三頁。

加藤哲郎『「飽食した悪魔」の戦後』二〇頁以下。同『七三一部隊と戦後日本』花伝社、二九頁以下。シェルダン・H・ハリス『死の工場』柏書房、一九九九年、訳注四八頁注二二五。

八年八月香港へ出国―加藤」と話して居るのを聞きましたが、私はその時暗号内容が解らぬ時代でありましたから打電したか如何かは確實ではありません。

米国より早かったソ連の日本細菌戦計画察知

海外のゾルゲ事件研究を調べてみると、ロバート・ワイマンの遺作『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』の中に、本文ではないが、関連する註記が見つかった。ゾルゲの話し相手のギンター・シュタインは、イギリスの新聞記者で、『エコノミスト』誌などの特派員、一九三八年には日本から離れていた。そのためゾルゲ事件では、「積極的同調者」として名前は挙げられたが、捕まっていなかった。したがって、日本の特高警察や憲兵隊によって追跡され調べられることはなかった。

ワイマンは、ギンター・シュタインに閑説して、「興味深いのは、スタインとゾルゲが、ハルビン郊外の日本軍研究所でコレラ菌やペスト菌を散布する兵器の研究をしているという最高機密事項を昭和一二年に話題にしていたと、クラウゼンが回想していることである。日本帝国陸軍の細菌戦計画の詳細が日本人に広く知れ渡ったのは、一九七〇年代以降のことなのである」と註記していた。これらはすでに、拙著『「飽食した悪魔」の戦後』に記してある。米国が日本の細菌戦に注目する一九四一年より五年早く、一九三九年ノモンハンでの日ソ軍事衝突（ノモンハン事件、ハルハ河戦争）の際には、ソ連は日本軍の細菌戦に対して対策を取っていたと推定できる。また、一九四五年八月ソ連軍の満州侵攻に始まるシベリア抑留の日本人捕虜のなかから細菌戦関係者として約一〇〇〇人を抽出し、一〇〇人ほどから詳しい供述をとり、一九四九年末のハバロフスク裁判で最終的に一二名を起訴し有罪判決を下す準備が整っていたと考えられる。

ゾルゲ事件研究から見つかった一九三二年発足時細菌戦情報漏洩の新事実

ところが、二〇二〇年代になって、さらに新しいソ連側による日本側細菌戦情報の取得が、ゾルゲ諜報団とは直接関係しないが、ハルビン特務機関内部に入り込んだと思われるインテリジェンス情報によって明らかにされた。筆者が病気療養中に病床で翻訳に取り組み、鈴木規夫・愛知大学教授と共訳で刊行したオーウェン・マシューズ『ゾルゲ伝』（みすず書房、二〇二三年）には、元ニューズウィーク・モスクワ支局長であるジャーナリスト・マシューズが、小松原道太郎中将「ハニートラップ・スパイ」説との関わりでモスクワのロシア国防省中央文書館で確かめたい、以下の情報が記されていた。

一九三三年、モスクワに日本の機密電報が届き、日本がソ連から中国東方鉄道を奪取する意図があることが暴露された。また、無名の諜報員による秘密資料には、一九三二年八月、ハルビンで行われた東京参謀本部ロシア部長による、対ソ連兵器としての生物兵器の重要性に関する恐ろしい報告が含まれていた。この報告は非常に憂慮すべきもので、トゥハチエフスキー元帥、スターリンは自ら読んだという。

ここで出てくる小松原道太郎中将（一八八〇―一九四〇年）は、一九三九年のノモンハン事件時の日本側現地司令官にあたる第二三師団長である。ノモンハン事件での日本側被害は甚大で、小松原中

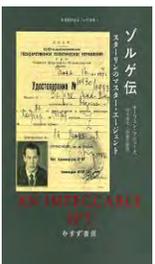
『現代史資料 ゾルゲ事件 四』みすず書房、一九七二年、二八〇頁・

ロバート・ワイマン『ゾルゲ 引き裂かれたスパイ』西木正明訳、新潮社、一九九六年、一五九―一六〇頁。

『「飽食した悪魔」の戦後』三三―三四頁。この部分は、同書の重複使用である。

オーウェン・マシューズ『ゾルゲ伝 スターリンのマスター・エージェント』みすず書房、二〇二三年、二七〇頁。

将はその直接の責任者であった。一九一五年陸軍大学校（第二七期）を卒業した後、ロシア大使館付武官補佐官、参謀本部員、陸大教官、ソ連大使館付武官、歩兵第五七連隊長、関東軍司令部付（ハルビン特務機関長）などを歴任している。二〇一一年一月、黒宮広昭インディアナ大教授が、日本とロシアの公文書などを基に、小松原がソ連のハニートラップに引っかかり、ソ連の対日情報工作に協力するスパイだった可能性が大きいと発表した。同様の説は、以前からロシアの研究者などが唱えていた。



ノモンハン事件小松原中將によるハルビン特務機関長時代のハニートラップ諜報

『ゾルゲ伝』のマッシュューズの説は、これを補強するもので、小松原が一九二七年から三三年のハルビン特務機関長時代に、ハニートラップにより重要な情報をソ連に流していたが、一九三九年のノモンハン戦争時はすでに改心していたのか、ソ連側に情報が漏れた気配はない。したがって、ノモンハン事件の日本軍の敗北の責任を小笠原中將のスパイ活動に帰するのは適当ではない、という文脈で語られたものである。マッシュューズは、ノモンハン事件について以下のように述べて、一九三二年八月生物兵器情報のインテリジェンスにつないでいる。

ノモンハン事件はソ連の諜報機関によって仕組まれたものだったのだろうか。小松原がソ連諜報員であった可能性を示す有力な証拠がある。小松原は、一九〇九年にサンクトペテルブルクで一年間ロシア語を学んだのを皮切りに、一九一九年にモスクワで軍事担当補佐官、一九二七年から三〇年まで日本大使館の駐在武官を務め、キャリアの大部分をロシアで過ごしていた。一九八三年にソ連の歴史家がモスクワで彼を監視していたソ連防諜関係者インタビューしたところによれば、小松原は「酒、放蕩、暴力を貪ること」に耽溺していた。この関係者によれば、合同国家政治保安部（OGPU）は小松原を陥れるためにハニートラップを仕掛け、一九二七年、エストニア出張の際に、彼を誘惑するため美しい女性工作員を送り込んだという。モスクワに戻った小松原は、大使館のもう一人の同僚とともにこの愛人と酔っ払ってしまい、自室の金庫の鍵を失くしてしまった（あるいは、合同国家保安部（OGPU）の狡猾な女性工作員に盗まれてしまったのかもしれない）。小松原は、自分の不始末が東京に報告されるのを防ぐために、「何でも承諾する」覚悟でいた。……はつきりしていることは、一九二七年以降に小松原「道太郎」が赴任した先では、東京への誤報、ソ連情報部へのリークが相次いだということである。小松原は一九三二年から三四年までハルビンの特務機関長を務めていた。ポドルスクにあるロシア陸軍の中央公文書館には、小松原のハルビン駐在と同時期の、日本、中国、満州に関する詳細な情報があるが、それ以前も以後もほとんどない

研究領域が違うと見逃されがちな新事実

マッシュューズはさらに、以下のようにも述べて、黒宮教授の論文の再検証を求めている。

小松原はモスクワで、ソ連情報部専門用語で言うところの「釣針に引っかかり」、ハルビンから情報を送った可能性は十分にある。しかし、ノモンハンにおけるソ連側代理人としての小松原に対するスパイ行為に欠けているのは、彼が満州第二三師団長時代にソ連情報部の管理者あるいは情報部と直接に接触していたことを示唆するソ連の記録の痕跡である。日本軍の攻撃を誘発することについて、クレムリンと話し合った証拠もない。ノモンハン事件はスターリンの発案であり、日本陸軍の上級諜報員によって行われたと推測するのは興味深い。日本が挑発し、ソ連が決定的に勝利する短期決戦は、日本のソ連侵攻の野望を冷ますためにスターリンがまさに必要としていたものであった。しかし、当分のあいだ、それは証明されないままである。

以上のことは、ゾルゲ事件を含む日ソ諜報戦の研究では、ある程度知られていたことの、旧ソ連公文書館文書による確認である。だが、日本の七三一部隊研究、細菌戦・人体実験研究にとっては、新たな大きな意味を持つことになる。つまり、生物化学兵器開発における日本軍の「負の遺産」や戦後アメリカの巨大システム・先端性ばかりではなく、秘密主義で隠蔽されてきた旧ソ連・ロシアの歴史的役割を、改めて検討する必要がある。

似たようなケースで、大きな研究成果を挙げたのが、倉沢愛子・松村高夫『ワクチン開発と戦争犯罪』（岩波書店、二〇二三年）である。戦時日本に占領されたジャカルタ収容所での、インドネシア人「ロームシャ」の破傷風による大量死亡事件については、反日活動のためにワクチンを汚染させたとしてインドネシア人医師「モホタル」が逮捕・処刑されたが（モホタル教授事件）、インドネシア現代史を研究する倉沢愛子教授は、それを日本軍のデッチ上げた冤罪ではないかと疑い、長く史資料を集めていた。

そこに、関東軍七三一部隊による細菌戦や「マルタ」の人体実験を長く追いかけてきた同僚松村高夫教授が、平房本部から戦時は南方軍にまで広がった防疫給水部の医師たちの転戦記録のなから、倉内喜久雄という七三一部隊大連支部血清課長から転任して南方軍防疫給水部パスツール研究所長になったワクチン学者を見出して、真犯人はどうやら倉沢喜久雄等パスツール研究所による破傷風ワクチン開発の人体実験だったらしいことが分かった。

さらに一九四八年の帝銀事件で名刺が使われた厚生省の松井蔚も、モホタル事件当時はパスツール研究所の総務部長兼研究部長であったことから、帝銀事件の松井証言を調べて真相究明が補強された。インドネシア現代史研究と日本陸軍防疫給水部隊研究の事件から七〇年を経たドッキングであった。

三 ソ連より一〇年遅れたアメリカの細菌戦対策と東西冷戦下の情報戦

米軍が日本細菌戦を知ったのは一九四一年、しかしナチス・ドイツ対策中心

アメリカは、戦後すぐの時期から、戦犯免責と引き替えに七三一部隊から得た生体実験データ等をもとにして、フォートデトリックで長く生物兵器を研究し開発してきた。

同上、二七〇―二七二頁、原註は巻末六四頁注三六、Hiroaki Kurosawa, *The Mystery of Nomohan, 1939: The Journal of Slavic Military Studies*, Volume 24, 2011, 4.

「小松原師団長はソ連のスパイ？」ノモンハン事件で新説『朝日新聞』二〇一一年二月八日。岩城成幸『ノモンハン事件の虚像と実像・日露の文獻で読み解くその深層』彩流社、二〇一三年。

倉沢愛子・松村高夫『ワクチン開発と戦争犯罪』岩波書店、二〇二三年、参照。
その経過は、エド・レジス『悪魔の政治学』河出書房新社、二〇〇一年、に詳し。

米軍が日本軍の細菌戦を知り、本格的に取り組んだのは、一九四一年一〇月、真珠湾攻撃の直前で、陸軍省長官ヘンリー・スチムソンは、国立科学アカデミーに、「我が国は仮想敵国の生物戦によって危機に陥る恐れがあるので、現在の状況と将来の可能性を明確にする調査を開始するように」指示した。もっとも同盟国イギリスは、一九三六年後半には帝国防衛委員会に「細菌兵器導入の現実性」についての調査を始め、ナチス・ドイツを念頭に防衛策の検討を始めていた。一九四一年一月、中国・湖南省常德での七三一部隊のペスト作戦の頃には、中国紅十次と英米諜報機関は日本の細菌戦を疑っていた。

一九四一年には日本軍の細菌戦を知って情報を集め、四五年春には風船爆弾と共に、石井四郎指揮下の関東軍防疫給水部がハルビンで細菌爆弾を実験中、と特定していた。ただし米国の生物兵器対策は、何よりもヒトラーのナチス・ドイツに対抗する一部であり、イギリスと情報を共有していた。

英国では一九四二―四三年にスコットランドのグリニャード島で有名な炭疽菌の大規模散布実験が行われた。同じ頃、米国でも生物兵器の開発が始まったというが、これらはドイツ軍が細菌兵器の開発を行っていて、それをロケットに積み込むという情報によってだったと伝えられる。しかし、これは誤報で、第二次大戦が終結してみると、ドイツ軍の細菌兵器の開発は、日本の七三一部隊に比すれば初歩的であった。



天皇の戦争責任を恐れた七三一部隊による細菌戦・人体実験の隠蔽

一九四五年八月、日本の敗戦は決定的になった。八月六日の広島に続いて、九日には長崎に原爆が投下された。同じ日、ソ連軍は満州国との国境を越えて参戦した。八月一日にポツダム宣言受諾、「内地」では一日に昭和天皇の玉音放送で「終戦」とされたが、旧満州では、八月二十九日の最終的停戦まで戦争が続いた。機械化された大戦力で進撃するソ連軍に対して、関東軍に抵抗の余力はなく、多くの軍人・軍属が捕虜となってソ連に移送された。いわゆるシベリア抑留である。

関東軍七三一部隊は、もともとソ連との戦争を想定して、細菌戦研究・実験を進めてきた。しかし実際には、ソ連軍との戦闘が開始されて真っ先に証拠を焼却・隠滅し敗走したのが、七三一部隊関係者であった。それは、石井四郎と七三一部隊の独断ではなく、関東軍の命令によってでもなく、細菌戦について天皇に責任が及ぶのをおそれた「内地」の参謀本部からの指令によるものであった。

つまり、敗戦によって七三一部隊の存在と人体実験・細菌戦が明るみに出ると、ジュネーブ協定違反で関東軍の実行犯が追及されるのみならず、陸軍中央・昭和天皇の戦争責任に波及する可能性がある。関東軍参謀の七三一部隊担当は、宮田参謀と称していた天皇の従兄弟・竹田宮恒徳であり、天皇の弟・秩父宮も視察にきていた。沖繩戦や広島・長崎の原爆投下後も日本政府が無条件降伏を渋っ

ピーター・ウィリアムズ・デヴィッド・ウォーレス著『七三一部隊の生物兵器とアメリカバイオテロの系譜』かもがわ出版、二〇〇三年、七八―八四頁。

たのは、天皇制維持、かの国体護持のためであった。石井四郎と七三一部隊の国際法違反は、国体護持のために、どうしても隠さなければならなかった。これらは別著で詳しく述べた。

戦犯免責とバーターでの細菌戦データ獲得と七三一部隊の隠蔽・免責・復権

しかしながら米軍は、第二次世界大戦に参戦した主要国の中で生物兵器に注目したのは一番遅かったにもかかわらず、戦後は、日本軍から得た資料と人材をもとにして、大規模な生物兵器工場をつくりあげた。マンゴールドIIゴールドバーグ『細菌戦争の世紀』の表現で言えば、「一九五〇年代に米陸軍は、石井をはじめ七三一部隊の研究者にとっては夢のような生物戦研究用施設を建造した。そして、一九六〇年になるまでに、アメリカは、それを作った科学者当人たちでさえ信じられないほど、とてつもなく恐ろしく、精巧な生物兵器の数々を作り出していた。」

これは、よく知られているように、米軍の四次の調査団が来日して石井四郎等七三一部隊の幹部・医師・医学者を尋問し、人体実験を含む膨大な実験データ・尋問記録・証言とバーターで極東軍事（東京）裁判にもかけず、朝鮮戦争期には七三一部隊員の復権を許し、むしろ石井四郎・北野政次等旧幹部を米軍・国連軍に協力させ細菌戦を実施した、といわれる論争問題の土壌となった。

四次の調査団の内、一九四五年秋のサンダース調査団につぐ、一九四六年初めの第二次調査団はA・T・トンプソン獣医中佐が率いていたが、GHQ・G二の協力を得た尋問相手は七三一部隊隊長をつとめた石井四郎・北野政次らが中心で、一〇〇部隊隊長若松有次郎獣医中佐ら一〇〇部隊関係の獣軍医が尋問されることはなかった。一〇〇部隊関係者は、私たちの前著で詳述し、本書で再論するよるに、帰国した紀野猛・西村武の内部告発をきっかけに、山口本治獣医少佐らがGHQ・IS(法務局)ニール・スミス中尉らの取調べをうけたが、途中でG二が妨害して中途半端に終わり、起訴されることはなかった。

一九四七年第三次フェル調査団、第四次ヒルIIヴィクター調査団との交渉で、石井四郎等七三一部隊関係者は、データを提供しての戦犯免責に成功し、その後、帝銀事件への捜査協力を経て、医学界・医療界・厚生行政と医薬産業に復権していった。一〇〇部隊関係者も、次節で述べるように、似たような軌跡を辿る。

ヒル博士作成の一九四七年一月二日付第四次調査団最終報告書（総論）は次のように述べていた。二年半の七三一部隊による隠蔽・免責作戦の結果は、米軍に総額二五万円（今日の二五〇〇万円相当）で買い取られたデータとバーターでの極東国際軍事裁判不訴追、戦争責任からの免除だった。

この調査で収集された証拠は、この分野のこれまでにわかっていた諸側面を大いに補充し豊富にした。それは、日本の科学者が数百万ドルと長い歳月をかけて得たデータである。情報は、特定の細菌の感染量で示されているこれらの疾病に対する人間の罹病性に関するものである。かような情報は我々自身の研究所では得ることができなかったものである。なぜなら、人間に対する実験には疑念があるからである。これらのデータは今日まで総額二五万円確保されたのである。研究にかかった実際の費用に比べれば微々たる額である。

さらに、収集された病理標本はこれらの実験の内容を示す唯一の物的証拠である。この情報を自発的に提供した個人がそのことで当惑することのないよう、また、この情報が他人の手に入ることを防ぐために、あらゆる努力がなされるよう希望する。

加藤『「飽食した悪魔」の戦後』第一章。

マンゴールドIIゴールドバーグ『細菌戦争の世紀』四二頁。

松村高夫編『論争七三一部隊』晩聲社、一九九四年、二八一頁。

フォート・デトリックなど二〇世紀後半米国の「現代的」生物兵器開発

山内一也は、もともと獣医学者であるが、エド・レジス『悪魔の生物学』（河出書房新社、二〇〇一年）の監訳者でもあり、現代日本の生物兵器研究・ワクチン研究の最前線にいる。

山内によれば、米国が本格的に生物兵器開発に乗り出したのは第二次大戦終結後である。追い風になったのは東西冷戦だった。首都ワシントン郊外に設立されたフォート・デトリック（一九五六年にキャンプ・デトリックが改称）が生物兵器開発の中心となった。実戦を想定して、まずは無害の細菌を国防省（ペンタゴン）の建物に撒布する模擬実験、サンフランシスコ沿岸で蛍光を発する硫化カドミウム亜鉛の粒子の撒布実験などを行った。一九五〇年には、フォート・デトリックに八ボールと呼ばれた巨大な地球儀のような建物を細菌の散布実験用に建設した。開発の最終段階は、実際に人間での実験になった。ユタ州のダグウェイ実験場でボランティア兵士に対して熱病原体散布が行われた。

このような段階を経て、米国は一九五二年には生物兵器による実戦の準備はすべて整ったといわれる。しかし、一九六九年にニクソン大統領が攻撃用生物兵器開発の中止を突如決定し、これらの計画はすべて中止された。三〇年間にわたる米国の生物兵器研究は、最後の段階では七三一部隊最盛期に匹敵する四〇〇〇人が参加する大規模なものになっていた。

残されたのは、防御用生物兵器開発（ワクチンなどの予防法や診断法）で、これは陸軍感染症研究所に引き継がれて現在にいたる。一九八九年にワシントン郊外で見いだされたカニクイザルのエボラウイルス感染の際に活躍し、ベストセラー小説「ホットゾーン」や映画「アウトブレイク」のモデルにもなった、という。



「古典的」細菌学から医学と獣医学が融合するウイルス・遺伝子・分子生物学の「現代的」研究へ
和気朗『生物化学兵器』（中公新書、一九六六年）は、東西冷戦さなかのベトナム戦争初期の著作であるが、七三一部隊から朝鮮戦争に至る時期の生物兵器を「古典的」として、一九六〇年代以後の「現代的」生物兵器と区別している。

つまり、病原体散布に媒介昆虫を用いた七三一部隊の時代の生物兵器は、予防措置が可能なら効率の悪い方法なのに対して、ベトナム戦争期には、ウイルス学、微生物遺伝学、分子生物学など生物科学の新しい手法を用いて、病原体の性質そのものを人為的に変え、自然感染経路ではなく呼吸器から肺に直接病原体を送り込むエアゾール噴霧方式が可能になっていた。米国のフォート・デトリックではそうした研究が進んでおり、日本の七三一部隊の段階とは異なるものとなった。

このことは、ペスト菌・コレラ菌や炭疽菌、鼻疽などを七三一部隊の医師・医学者たちと、一〇〇部隊の獣医師・獣医学者がそれぞれに行っていた細菌戦研究のあり方をも、変えていった。

以上について、山内一也・三瀬勝利『忍びよるバイオテロ』NHKブックス、二〇〇三年、日本獣医学会連続講座・山内一也「人獣共通感染症」https://www.jsvetsci.jp/〇五_byouki/ProfYamauchi.html
和気朗『生物化学兵器』一一六一―一二〇頁。

もともと戦時中の日本の生物兵器は、航空機や戦車など機械化が遅れ、軍馬を大陸まで運び南方戦線まで使わざるをえなかった日本軍の近代化の遅れの副産物だった。医学・医師養成を管轄する厚生省の管轄と、馬など家畜を守り獣医を育成する農林省の関係が、そのまま陸軍軍医学校・獣医学校の棲み分け・併存、七三一部隊・一〇〇部隊の研究上の競合に表現されていた。

安達の人体実験などで両部隊が交わる機会があったが、米国はもっぱら七三一部隊に注目し、戦後の実験データ提供によるGHQ・G2による免責も、旧七三一部隊の医師・医学者中心であった。一〇〇部隊も旧隊員の内部告発からGHQ・IS（法務局）の人体実験調査を受けたが、GSにより妨害されることで獣医たちは告発されることがなかった。

第二次世界大戦中は、米国以外ではなお軍馬が運送手段として用いられたが、戦後は軍馬中心の生物兵器研究は過去のものとなっていった。医学も獣医学も、ウイルス・遺伝子レベルの病源を扱うようになり、分子生物学とゲノム解析を踏まえた「現代的」研究へと移行していった。

四 生物兵器禁止条約、バイオハザード、バイオテロへ

一九二五年ジュネーブ議定書から一九七五年生物兵器禁止条約へー日本の責任と役割

第一次世界大戦の経験から毒ガスと共に生物兵器も禁じられた一九二五年のジュネーブ議定書の「細菌学的手段の戦争における使用の中止」から、新たな国際法上の生物兵器禁止条約が必要になったのも、基本的にはそうした「古典的」生物兵器開発段階から「現代的」段階への、分子生物学・ゲノム技術発展によるものだった。生物兵器の使用禁止だけではなく、生産・貯蔵・廃棄をも規制するものが必要になった。

二一世紀の新型コロナウイルス・パンデミックでも見られたが、本来は人類共通の問題である感染症が、なぜ国家単位での厳しい対立になっていくのかが問われている。例えば感染源について、アメリカ・トランプ前大統領が「あれは、チャイナ・ウイルスだ」と中国を貶めようとし、対して中国側が「あれはアメリカが秘かに持ちこんだ生物兵器だ」と反論するような関係が生まれている。

生物兵器の使用は、一九二五年のジュネーブ議定書で使用は禁止されていた。第二次世界大戦中は、アメリカも、ナチスドイツも、旧ソ連も、生物兵器の防衛的研究は進められていた。しかし実際にそれを攻撃に使用して、犠牲者を出すところまで徹底したのは、日本だけであった。日本が生体実験までして生物兵器を作り出し、中国人やロシア人三〇〇人以上の人体実験、二万六〇〇〇人から三万人もの細菌戦による犠牲者を出したことが、第二次世界大戦後の感染症対策を、大きく規定したのである。

第二次世界大戦後、国連の下に世界の人々の健康を守ろうとする国際組織、世界保健機構（WHO）が設立されたが、いわゆる冷戦の時代にはアメリカと旧ソ連が中心になって、冷戦崩壊後の二一世紀にはアメリカと中国の対立が軸になって、本来人類全体で当たるべき感染症対策に、国家間対立の影、国家安全保障と危機管理の問題が加わっている。

ソ連のハバロフスク裁判と生物兵器開発によるバイオハザード

第二次大戦が終結してみると、ドイツ軍の細菌兵器開発は初歩的で、日本こそが攻撃用細菌戦・生物兵器開発の第一線にいたことがわかった。

その日本の細菌戦体制が、戦後冷戦期の米ソの生物兵器開発のモデルとなった。アメリカは、戦後すぐの時期から、石井四郎等の戦犯免責と引き替えに、七三一部隊が得た生体実験データ等をもとにして、フォートデトリックなどで長く生物兵器を研究し開発してきた。



一方ソ連軍は、終戦直前の一九四五年八月九日に満洲に入って、逃げ遅れた七三一部隊関係者を捕虜にし、詳しい尋問をしてシベリアの収容所に送った。旧満洲国の七三一部隊・一〇〇部隊跡地などから、隠蔽・焼却しきれずに残された実験機器や資料の断片、それに残された資料の一部もソ連に運んだ。

一九四九年末のハバロフスク裁判で細菌戦を告発したように、七三一部隊関係の資料や証言を集めたばかりでなく、核兵器開発と同じように、国内の秘密都市で、一九五〇年代から九〇年代のソ連の崩壊まで、生物兵器の研究を進めた。第一節で見た山本幡男ら一〇〇〇人が送られたスヴェルドロフスクは、その秘密都市の一つであった。その大きな細菌戦基地は、ハルビン郊外にあった旧七三一部隊の工場跡地の地図を元にして、旧ソ連内にそれを再現し、七三一部隊の「古典的」生物兵器の研究を継承し発展させようとした。

もともと一九八九年にハバロフスクで出版されたソ連の七三一部隊告発書、イワノフIIボガチ『恐怖の細菌戦』は、ハバロフスク裁判のソ連側告発、森村誠一『飽食した悪魔』の内容紹介、それに朝鮮戦争とその後のアメリカによる生物兵器開発とキューバや中南米での使用疑惑については詳しいが、ソ連自身が一九三二年以来追いかけてきた、日本軍による細菌戦情報をベースにした戦後ソ連の生物兵器開発には、一言も触れない。冷戦期情報戦に典型的な東側の研究であった。

ところが、一九八九年の冷戦崩壊、九一年のソ連解体を経て、ソ連自身による生物兵器開発の歴史、その過程での一九七九年にスヴェルドロフスク炭疽菌漏洩バイオハザードの事実が、米国に亡命したロシア人科学者等の手で明らかにされた。スヴェルドロフスク（現在のエカテリンブルク）は、ハルビン郊外平房をまねて作った細菌生物兵器専用の工場を持った秘密都市で、研究していた生物兵器のものになる炭疽菌が漏れ出して、公式には六六人死んだとされている。もともとそれは、米国防オート・デトリックに比すれば、バイオハザード事故に対する防備・施設管理も脆弱なものであった。公式数字とは別に、恐らく一〇〇〇人以上が犠牲者になっただろうと言う。

それを察知したアメリカは、生物兵器は研究段階でも些細な不注意・事故で大規模災害が起こりうることを学び、そこで、バイオ・セイフティ・レベル（BSL）とよばれる細菌・ウイルス研究施設の管理問題が提起され、日本でも旧予防衛生研究所・感染症研究所の移転問題や長崎大学などで、BSLが問題にされるようになった。

オウム真理教から始まったバイオテロの時代

そればかりではない、生物兵器の歴史で再び日本が注目されたのは、一九九六年に地下鉄サリン事件により大量検挙されたオウム真理教事件によってであった。オウム真理教は、新興宗教としてロシアに布教しようとしたばかりでなく、崩壊した旧ソ連から流出した生物化学兵器の技術を意識的にとり入れ、「貧者の核兵器」を作ろうとしていた。

アリベック『バイオハザード』二見書房、一九九九年、六一頁。

Ⅱ・イワノフII・ボガチ『恐怖の細菌戦——裁かれた関東軍第七三一部隊』恒文社、一九九一年。
アリベック『バイオハザード』一〇〇頁以下。

生物兵器は、たんに戦争における武器であるばかりでなく、平時に開発途上のバイオハザード災害をおこし、時には個人的テロの手段としても関心が持たれるようになった。つまり、生物兵器を個人単位でばらまいたり、暗殺に使ったりすることが、現実には起きる段階になった。日本のオウム真理教事件がその先駆であり、世界的には二〇〇一年九・一一の米国同時多発テロ直後におこった、アメリカの政府要人に郵便で炭疽菌がばら撒かれた事件（米国炭疽菌事件）で広く知られるようになった。

バイオテロでは、個人が生物兵器をばら撒いて、社会的な大混乱を起こすことが可能になる。山内一也によると、このバイオテロを一番初めに始めたのは日本で、具体的にはオウム真理教の麻原彰晃であった。サリンのような化学兵器だけではなく、**ボツリヌス菌**・炭疽菌など生物兵器の製造・使用も、実際に準備されていた。そして、アメリカ軍やCDC（疾病予防管理センター）は、生物兵器対策の研究中に細菌やウイルスが漏れてはいけない、それに加えバイオテロ対策が必要だとして、生物兵器への防御策の研究を強化した。オウム真理教がソ連崩壊期のプーチンのロシアから入手しようとしたように、軍事強国化した中国、核保有の独裁国家北朝鮮などでも、生物兵器の開発は続いていると考えられている。

日本でも、生物兵器について、①簡単に人から人へ拡散、伝播すること、②高い死亡率であること、③パニックを引き起こし、社会を壊滅させること。④公衆衛生上の対策で、特別な準備を必要とすることという四つの特徴を挙げて、特に炭疽菌による大量同時殺人がありうるとして、二〇〇一年以降、日本医師会のホームページに、次のような警告を掲載している。

「生物兵器は、従来の化学兵器に比べ、より破壊力（殺人力）が大きく、安価であることが特徴である。そして、生物兵器に用いられる生物量は、比較的コントロールしやすく、輸送や散布が容易なのである。一九九三年の米国政府機関（The United States Congressional Office of Technology Assessment）の報告では、一〇〇キログラムの炭疽菌（*Bacillus anthracis*）を首都ワシントンで空中にばら撒いた場合、一三万から三〇〇万人の死者がでると推計されている。これは、水素爆弾に匹敵するのである。」

したがって、二〇二〇年初めに中国の武漢からコロナウイルスが見つかった時、米国ですぐに始まったのは、これは生物兵器であるのか、それとも研究中に間違っただけで漏らしたものか（バイオハザード）、あるいは個人的に中国政府に対して怨みを持ったものの犯行か（バイオテロ）という犯人探しであった。特に武漢ウイルス研究所のBSL管理が注目され、米中両国の情報戦になったのである。

五味晴美「バイオテロリズムの危機——生物兵器（炭疽菌）によるテロリズム」二〇〇一年一〇月九日、日本医師会HP <https://www.med.or.jp/kansen/terro/bio.html>。

詳しくは、加藤哲郎『パンデミックの政治学』花伝社、二〇二〇年。山内一也・三瀬勝利『忍びよるバイオテロ』NHKブックス、二〇〇三年、日本獣医学会連続講座・山内一也「人獣共通感染症」https://www.jvetsci.jp/〇五_byouki/ProYamauchi.html